

# イグナティウス・デ・ロヨラ「靈操」の心理学的考察

河 東 仁

## はじめに

岸本英夫は修行に関して、これを概括的には「行いを通して心を鍛える営みである」とし、狭義には「心を鍛え、理想を体験の上に実現しようとする目的を持ってどれほどか組織的に営まれる身体的な行為動作」であると述べている<sup>(1)</sup>。この言述にも表われているように、そもそも修行なる営為には主体的自力的な側面が不可避的に伴われる。そのため、ちょうど「絶対他力」を唱える浄土真宗において修行が排されているように、唯一絶対の神とその被造物である人間との間に一線を引き、人間の側からのそれを超えようとする営為を無に等しいとみなすキリスト教においては、どうしても修行に積極的な価値をもたせることがなくなる。その意味においてイグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola, 1491?–1556) の「靈操」は、およそキリスト教圏において公認されている唯一の組織的な修行体系である点で、きわめて興味深いものと言えよう。

ちなみに、本稿は筆者がこれまで行なってきた修行研究の一環に位置するが、しかしこれまで修行における情動の変化に焦点を当ててきたのに対し、ここでは、イメージの問題を中心に考察を進めていく。その理由は、なによりもまずこの「靈操」がキリストの一生を観ずるイメージ行だからであり、そしてまた、修行による心の深層レベルの変化を探究する上で、イメージは情動と並んできわめて重要な手掛かりとなるからである。

なおこの「靈操」はイグナティウス自身の体験から編みだされたものであるため、彼の生涯を考察することなしには、その内容を分析することができない。そこで本稿の構成は次のようになる。

- I. 聖イグナティウス・デ・ロヨラの生涯
- II. 「靈操」の実際
- III. 聖イグナティウスの示現体験と自己実現
- IV. 「靈操」の心理学的特性

## I. 聖イグナティウス・デ・ロヨラの生涯<sup>(2)</sup>

【第一期】 世俗の騎士から神の騎士へ

1491年頃、スペインの北部に位置するバスク地方の旧家、ロヨラ城主の末子（同胞13人）として生を受ける。ちなみに翌1492年は、コロンブスによって新大陸が「発見」され、またイスラム教徒に対する「失地回復運動」が完了した年でもあり、まさにスペインの全盛期が始まろうとする時だった。こうした社会情勢の中で、イグナティウスは騎士としての訓練を受け、国勢を伸長せんとするスペインの武人として、さまざまな活躍をしていた。しかし1521年、パンプローナ市をめぐるフランス軍との攻防戦において、瀕死の重傷を負い、故郷のロヨラ城に送り返されてしまった。

ところが病臥生活において、彼は、思いも寄らない方向へ導かれることになった。彼は、退屈しのぎに騎士へ復帰した時のことを空想しようと、騎士物語を家人に頼んだ。しかしあいにく一冊もなく、その代わりに与えられたのが、『キリストの生涯』*Vita Christi*（カルトゥジオ会のザクセンのルドルフ著）と『聖人の華』*Flos Sanctorum*（ドミニコ会のヤコブ・デ・ボラジーネ著）であった。そしてそれを読んだところ、それまで思いも寄らなかった、新しい生き方のあることに気づいたのである。すなわち、主君に忠誠を誓い、高貴な婦人を崇拜する、それまでの世俗的騎士としての生活とは異なった、主なる神に絶対的忠誠を誓い、マリアを崇敬する、神の騎士としての生き方である。しかも、前者のことを想像すると、その最中は大変楽しいが、その後うら寂しい気持ちになるのに対して、後者のことを想像する時には、たとえ巡礼や鞭打ち等の苦しいことであっても、逆に慰めを覚え、その後も大きな満足感に包まれたのである<sup>(3)</sup>。こうして次第に、世俗的な享楽に溺れた生活への嫌悪が生じ、神に奉仕する騎士に生まれ変わって、聖地エルサレムに巡礼したいとの気持ちが生じてきた。この気持ちは、さらに、幼いイエスを抱いた聖母の幻視・示現が顕われたことによって、確固たるものとなった。ただしこの時点では、「聖ドミニコはこういうことをした、自分もしなくては。聖フランシスコがあのようなことをした、自分もしなくては」（『自叙伝』10番），という言葉に示されているように、武人的英雄主義的にひたすら苦行に邁進することが主たる願望であった。

翌22年、何とか歩けるくらいに回復すると、念願の巡礼の旅に出た。まずアランサスの聖母聖堂に行き、マリアに貞潔の誓願を立て、次にモンセラットの町へ向かった。ここで彼は、三日間にわたって聴罪司祭に総告解をするとともに、軍刀と短剣を教会の聖母の祭壇に捧げ、世俗的な騎士を捨て、神の騎士に生まれかわろうとの決意を改めて示した。

### 【第二期】 外的身体的苦行への武人的邁進から内的精神－靈の深化へ

モンセラットの近隣に、マンレーサと呼ばれる小さな町がある。当初の計画では、ここにはバルセローナへ向かう途中、ほんの二、三日滞在するだけの予定だった。だが彼は、

ここに十ヶ月以上も逗留し、後に体系化された「靈操」による精神・靈の浄化・深化過程を、いわば神に導かれる形で、独習することになった<sup>(4)</sup>。まず最初の四ヶ月ほどは、それまでの罪を償い、自己を浄化するために、托鉢・鞭打ち・断食を行なったり、洞窟にこもって祈りに専念していた。その結果、つねに穏やかで澄み切った気持ちに満たされるようになり、ついには、空中に「目ではないが目のよう輝くものをたくさん持った、美しい蛇のようなもの」(『自叙伝』19番)が幾度も顕われるまでになった。この示現によって彼は、より深い慰めと喜びを得ることができた。

ところがこの幻視体験は、次第にすさまじい精神・靈的変動をひき起こすようになった。このように慰めを感じ平静な状態にあったかと思うと、次の時には祈りを捧げたりミサに参与しても何の喜びも慰めも感じられなくなり、荒んだ気持に陥ってしまう。さらには、このような苦行を続けていたのでは命がもたない、という悪魔からのささやきさえ聞こえてくるようになったのである。このため彼は、モンセラットでの総告解が不十分だったと考え、告解をやり直してみた。しかし、いくらやってもまだ告白し残したことがあるような疑惑が消えず、ついには自殺の誘惑に駆られるまでになってしまった<sup>(5)</sup>。そこでまる一週間完全な断食を行ったり、睡眠時間を大幅に短縮するなど、苦行により邁進していく。だがその結果は、心身を衰弱させるだけで、疑惑から逃れることはできなかった。

この頃彼が熟読していた書物に、トマス・ア・ケンピスの『キリストにならひて』(De imitatione Christi) があった。この書は彼にとって、大きな転機となるものであった。ケンピスによって彼は、外的苦行よりも内的な精神・靈の浄化・向上の方が重要であることを知り、行き過ぎた苦行を中止してみた。すると、上述の疑惑から解き放たれたばかりでなく、それまでの苦行中心の生活が悪霊によってそそのかされたものであると思われてきたのである。こうして彼は、たとえ苦行のように正しいことをしようとする「靈動」——神や善霊、あるいは悪霊によって生ずる精神・靈や感情の動き——であっても、その結果もたらされるのが心身衰弱のように悪いものであるなら、それは悪霊のもたらした靈動であるとの結論に達した(この考え方は、後に「靈動弁別」と名付けられた)。

キリストの内面的な模倣の重要性を知った彼は、外的身体的な行よりも内的精神・靈的な行に力を入れるようになった。するとそれに連れて、さまざまな示現が彼の前に顕われだした。「荒寂」の状態をようやく抜け出て、「慰安」をもたらす「照明」の段階に来たわけである。その第一は、彼が当時深い関心をもち、毎日祈りを捧げていた三位一体が、「樂器の三つの鍵盤」という形をとって空中に顕われるという示現である。これは、彼が聖母の聖務日課を唱えているときのことであり、感激のあまり涙があふれて止まらなくなるほどであった。次の示現は、創造時の世界の光景であった。ミサのとき、聖体に一筋の白い

光が注ぐのも視た。そしてついには、キリストの姿の直接的な示現も得ることができた。これらの示現を彼はマンレーサにおいて数十回も体験したという。また後に、マリアの示現も視ている。ところでこうした体験の後に、彼が最初に体験して感激した、「無数の目をもつ蛇」が再び現われたが、今回は以前ほど素晴らしくは感じられなかつたため、これは自分を誤った方向へ導くために悪霊がもたらしたものと、改めて「靈動弁別」された。

こうして彼の精神 - 霊は非常な深まりを見せたが、このマンレーサでの体験を基にして、『靈操』の草稿が書き上げられた<sup>(6)</sup>。

### 【第三期】 独学の宣教者から正式の宣教者へ

1523年の初め、いよいよエルサレム巡礼の旅に出るため、マンレーサを後にし、まずバルセローナへむかった。そしてそこから船路でベネチアを経由して、ペストの流行やオスマン・トルコ軍によるロードス島の包囲などに阻まれながらも、とうとう念願のエルサレムに行き着くことができた。ところが、そこに留りたいと当地の管区長に希望したところ、経済上の理由から受け容れてもらえなかった。そこで彼は、これまで体験したこと人々に伝え、彼らを救う道に邁進することを決意した。そしてそのために、まずバレセローナへ戻って、そこでラテン語等の基礎的な学問を修めることにした。

1924年の初め、バレセローナに戻ったイグナティウスは、二年間にわたつて勉学に勤しみ、次いでアルカラに行き、およそ一年半のあいだ、文法・論理学・自然哲学・倫理学等を勉強した。またアルカラでは、勉学と並行して、人々に靈操を伝授したり、彼なりにキリストの教理を説明したりして、大勢の賛同者を獲得するようになった。しかしこの靈操の伝授により、もっぱら潜心と自己滅却を唱える「照明派」los alumbradosの嫌疑をかけられ、トレドの異端審問に付されることになった。その結果、疑いは晴れたが、彼の学識のなきを指摘され、四年間の勉学が終わるまで、宣教活動に制限を課せられてしまった。

そこで彼は、1528年の初め、パリに出て、モンテギュ学院および聖バルバラ学院でラテン語や哲学を一からやり直すことにした。そして1535年に哲学修士を獲得し、それまでに一年半にわたつて神学も専攻した。なおこの間に、後にイエズス会の主要メンバーとなった、ペトロ・ファーブル (Peter Faber) やフランシスコ・ザビエル (Franciscus Xaverius) を始めとする、六人の同志を得て、彼らに「靈操」を伝授した。そして彼らは、1534年8月15日、清貧と貞潔を守り、エルサレム巡礼を果たす、もしそれが不可能ならば、教皇の命ずる地に行き、そこで宣教の任にあたろうとの誓願を立てた。

しかし1535年の中頃、持病の腹痛が悪化したため、いったん単身帰郷して静養し、1536年の初めになってベネチアへ向かった。そしてそこで同志たちを待つ間に神学の勉学を修

了し、ついに1537年6月24日、司祭の資格を取得することができた。

#### 【第四期】 イエズス会の創立

ところがエルサレム渡航の方は、オスマン・トルコによる聖地占領のため、不可能になってしまった。そのため彼らは、先の誓願に従って、ローマへ行き、今後の活動を教皇に委ねることにした。

ローマ入りを前にした彼は、キリストを模倣して、40日間にわたって断食を行ない、祈りに専念した。すると、マンレーサ時代と並ぶくらい多くの示現を得ることができた。その中で最大のものは、ローマから数キロのところにあるラ・ストラーダ教会で体験した、「ストラーダの示現」である。ここで彼は、聖母のとりなしによって、御子キリストに仕える者として、父なる神が自分をキリストと一緒に置いてくれる、という示現を得ることができたのである<sup>(7)</sup>。

こうして、神によってキリストの伴侶として選ばれたとの確信を得たイグナティウスは、1538年4月21日、復活祭の直後にローマ入りし、さまざまな妨害に遭いながらも、11月に教皇パウロⅢ世に謁見することが許された。そして1540年9月27日、彼の考案した「靈操」の精神を文章化した「基本精神綱要」*Formula Instituti*を基にして、新修道会「イエズス会」*Institutum Societatis Iesu*が正式に発足した<sup>(8)</sup>。初代の総会長（終身制）にはイグナティウスが選任され、1556年7月31日に死去するまで、会の統治に献身した。

## II. 「靈操」の実際

周知のように、キリスト教の行において中核的な位置を占めるものとして、「祈り」*oratio*があり、口で唱える「口禱（誦禱）」と、心の中で念ずる「念禱（默禱）」とに大別される。その中で「默想」*meditatio*と「観想」*contemplatio*は、後者の代表をなすものであるが、両者は微妙な相違を見せている。あえて言うと、まず「默想」は、ラテン語の《よく考える》*meditatio*を語源とし、「考察的祈り」「推論的祈り」などとも呼ばれるように、主として知性に依拠して——場合によっては心情や意志の助けも借りて具象的なイメージを喚起しつつ——、信仰上の神祕や神の要請など、神に関する事柄を《よく考える》といった意味をもつ。それゆえ「默想」には、常に、「メディテイトする」対象があり、主体と客体の亀裂があくまでも存在することになる。一方「観想」は、ギリシア語の《観照》*theória*——ラテン語で*contemplatio*——に由来するものであり、たとえば「五感では把えられない事象を理性で直觀する思索活動」（アリストテレス）、さらには「知覚した真理を

賞讃し楽しむこと」(アウグスティヌス), 「愛を生み出す神キリストの真理の純然たる直観」(トマス・アクィナス)といったことを意味する。そしてその際に, 認識主体が客体と全面的ないし部分的に合一して, 自己が失われる忘我状態<sup>エクスター</sup>になることを特徴とする。そのため知識を三つの段階に分け, 観想*contemplatio*を, ①認識*cogitatio*②默想*meditatio*に次ぐ, 最高段階の知識とみなす場合もある。

ところがイグナティウスの場合, 両者を厳密に区別して用いているとは言い難い。たとえば, 随所において何の規定もなく「默想」*meditación*と「観想」*contemplación*を並列してたり(2番, 47番etc.), 第一週の第一靈操に関して, 45番では「罪についての默想」としつつ, 何の断りもなくそれを74番で「観想」と書き換えている。それゆえ, 上述の区別をあえて「靈操」全体に当てはめてみると, 精神操者が神と合一する——神の愛に包まれる——第四週の「愛を得るための観想」のみが厳密な意味での「観想」に当たり, それ以前のものはすべて, キリストの生涯を主題とする諸々のイメージを喚起して, その意味を考察する「默想」であると言うことができよう。言い換えると, 「靈操」とは, 一定のプログラムを通してキリストの生涯を「默想」する, すなわちキリストに関するさまざまなイメージを発現させ, それを考察することによって, 精神操者がそれまでの生き方を深く反省・否定するとともに神の愛を知り, 最終的に神の愛に包まれた——神と合一した——「観想」の状態に入ることを目的とした修行体系なのである。

なお, 「靈操」*Ejercicios Espirituales*という用語は, 直訳すれば「精神-靈の修練」である。しかし『靈操』1番において, 「靈操とは, 良心の糾明, 默想, 観想, 口禱と念禱のあらゆる方法を意味する。……散歩したり歩いたり走ったりするのを体操というが, 同じように, 靈魂を準備し整えるあらゆる方法を」指す, とされている。そこで本稿では, 「靈操」の語を用いることにする。

さて「靈操」の実際であるが, イグナティウスは, これを大きく四段階に分け, 原則として一段階に一週間をあてて, 30日ほどで修了するようなプログラムを組んでいる。そこで本章では, 週ごとに, 默想を中心にして, 精神操の内容を紹介してみたい<sup>(9)</sup>。

### 【第一週】 淨化段階——罪に関する默想

偽ディオニシウスに従えば, この週は, 罪の自覚を目的とする「淨化道」*via purgativa*にあたる。

具体的になされることとしては, 第一に, 自らがいかに罪を犯しやすい存在であるかを自覚する, 良心の「特別糾明」および「一般糾明」がある。「特別糾明」とは, まず起床時に自らの矯正したい罪や欠点をいくつか具体的に挙げた上で, それらを懸命に避ける努力

をし、それがどれだけ果たされたかを、昼食後に点検し、さらに夕食後にもう一度最終的に点検することを言う。しかしもちろん、こうした罪や欠点の改善は、個人の力では到底なしえるものではない。そこで神に対して、そもそも罪とは何かを教示してもらい、そうした罪や欠点の改善への助力を願い、これまでの過失への赦しを乞う、「一般糾明」がなされることになる。そしてこれと並行して、以下の默想によって罪の自覚が徹底される。

<第一靈操>……墮天使の罪・アダムとエヴァの罪・大罪を犯した人々の犯行場面、および彼らが地獄で苦しむあり様を默想する。そして、彼らが大罪とはいえたった一つの罪のために地獄に墮されたのに比して、自分があまりに多くの罪を重ねてきたことに恥じ入り、思い悩む。具体的には、まず各場面の心像を記憶の想起によって喚起した上で、それについて知的に考察し、さらに意志の力<sup>(10)</sup>を用いて、心の中に深い苦惱を呼び起こす。

こうして最後に、人間の罪を贖うために自ら十字架につけられたキリストの姿をイメージ化し、「対話」*coloquio*を試みる。すなわち、このような姿のキリストを観て、キリストの苦しみへの共感や彼に対する感謝など、心の中に浮かんでくることを一つ一つ彼に語りかけるのである<sup>(11)</sup>。

<第二靈操>……これまでに自らが犯した罪を順次思い浮かべ、自らの弱さ・無知・不義・悪を痛感し、他方で、そのような自分をも受け容ってくれる、神の全能・全知・正義・慈しみに讃嘆の声をあげる。そのために、これまで住んでいた場所や家・これまでの対人関係・これまでの職務の三点を、靈魂の三能力によって默想する。そして最後に、そこで感じたことを父なる神と対話する。

<第三靈操>……第一と第二の靈操を反復し、より多く靈動を覚えた場面の默想に心を集中させる。次に、そこで感じたことをマリア・キリスト・父なる神と対話する。

<第四靈操>……第三靈操と同じ。

<第五靈操>……地獄の默想。まず、五感を活用して、地獄のあり様がさまざまと目に浮かび、悲鳴や呪詛の声が聞こえ、臭気が漂い、苦渋が感じられ、地獄の炎になめられるまでに具象的にイメージ化する。次に、地獄にいる人々のことを思い浮かべて、その中に自分がおらず、これまで自分を憐れんでくれたことを、キリストに感謝する（対話する）。

なおこの週では、十字架上でのキリストの苦惱、さらには死や地獄といった悔恨や痛悔の念をもたらすものに集中して、天国やキリストの復活といった楽しみや喜びをもたらすものについて考えるのは極力避けることになっている。つまり、罪の徹底的な自覚である。

以上が、第一週になされる靈操の概要である。なお原則として、第一靈操は夜中、第二は起床の直後、第三は昼食の前、第四は晩課の時、第五は夕食の一時間前に行なわれる。

## 【第二週】 選択段階——「生路選定」

[第一日目] : <第一靈操><sup>(12)</sup> ……「託身」の默想、すなわち神の三つの位格が、人間の窮境を見て、人々を救うために第二のペルソナが受肉することを決め、天使ガブリエルをマリアのもとへ遣わす様を默想する。そのために、①地上における人々のさまざまな争い、②それを見ている三位一体、③天使のマリアへの来訪、の各場面をイメージ化する。次に、神の三つの位格およびマリアに対して、こうして受肉した主によりよく従うにはどうしたらよいか、自分の中で感じたことを語りかける（対話する）。

<第二靈操>……「降誕」の默想、すなわちマリアがヨセフや下僕と共にナザレを出発してから、ベツレヘムでイエスが誕生するまでのさまざまな場面の默想と対話。

<第三靈操>……強い靈動を感じた場面に重点を置いて、第一と第二の靈操を繰り返し、対話も同様に行う。

<第四靈操>……第三と同様。

<第五靈操>……第三と同様。ただし、五感を積極的に活用して、各場面のイメージをより具象的にする。

なお、第一靈操は夜中、第二は明け方、第三はミサの時、第四は晩課の時、第五は夕食前に、一時間ずつ行う（以下同）。

[第二日目] : 同様にして、神殿での幼子イエスの奉獻およびエジプトへの避難を二回にわたって默想し、次にそれを二回繰り返し、五回目の靈操で五感の活用を加える。

[第三日目] : 12歳の少年イエスがエルサレムで両親とはぐれたこと、およびそのあと神殿で発見されたことを二回にわたって默想し、次にそれを二回繰り返し、五回目の靈操で五感の活用。

[第四日目] : 「生路選定」elección……キリストの陣営とルシファーの陣営を、それぞれにはためく旗を焦点にして默想し、自分がどちらの旗の下につくかを「生路選定」する。すなわち、それぞれの陣営の様子を五感を通して具象的にイメージ化した上で、キリストの旗の下につくことを選定する。言い換えると、そのように選定するべく神に導かれていることに気づき、感謝を捧げる。そしてその父なる神の恵みをとりなしてくれるよう、マリアおよびキリスト、さらには父なる神自身に願う（対話する）。なお、以上の靈操は、まず夜中にルシファーの陣営の默想、次いで明け方にキリストの陣営の默想を行なって、さらにミサと晩課の時に二回繰り返す。

[第五日目] : 第一日目と同様にして、キリストのナザレからヨルダン川への道中と、受洗の様子を五回にわたって默想する。

以下、六日目に荒野における試み、七日目に使徒たちの召し出しとカナの婚礼での奇蹟、八日目に山上の垂訓、九日目に湖の上を歩くキリスト、十日目に神殿での説教、十一

日目にラザロの復活、十二日目にエルサレム入城（枝の日）を默想するが、この日数および内容は、靈操者の状況に応じて増減が自由になっている。

### 【第三週】 照明段階

この週は、偽ディオニシウスの三段階に当てはめると、「照明道」via illuminativaにある。すなわち、キリストの受難の各場面を默想することによって、「父なる神に見捨てられた神の子」という逆説のうちに、自己への囚われから解き放たれて神の許で生きる、すなわちそれまでの自己が死んで神の許に再生する、靈操の最終段階の様相が明らかになってくる。

[第一日目]：まず夜中に、第一靈操として、キリストがエルサレムへ向けてベタニヤを出発するところから、最後の晚餐までの様子をイメージ化する。この時、自らの罪を贖ってくれるキリストの受難に関して、キリストの苦惱を感じ取るとともに、自らのいたらなさに恥じ入って悩み乱れ、涙が出てくるよう努力する。そして、そこで感じたことをキリストに、さらには父なる神やマリアに語りかける（対話する）。

次いで第二靈操として、明け方に、同様の形で晚餐からゲッセマネの園までの各場面を默想する。そして、ミサと晩課の時に、以上を反復する第三・第四の靈操を行い、夕食前に、五感を活用して、第五靈操を行う。

なお、この週では、キリストの復活や天国のように、喜びをもたらす場面よりも、むしろ苦しみや痛みに悩む場面に力点が置かれる。キリストの苦しみを少しでも感じとり、それがことごとく人間の罪のためにあったことを悟って、神のために何をなし、何を耐え忍ぶべきかを考察するためである。

[第二日目]：同様にして、夜中にゲッセマネの園からアンナの家までと、アンナの家からカヤファの家までの各場面を默想する（対話も含む——以下同）。

[第三日目]：カヤファの家からピラトまでと、ピラトからヘロデまでの默想。

[第四日目]：ヘロデからピラトまでの默想。

[第五日目]：ピラトからイエスが十字架に付けられて息を引き取るまでの默想。

[第六日目]：キリストが墓に葬られてから、マリアが家に戻るまで。

[第七日目]：夜中と明け方の靈操で、以上の受難の全体を默想し、その後一日中、キリストの靈と体の状態について考察し、また後に残されたマリアの心痛、弟子たちの苦惱を感じるように努力する。

### 【第四週】 合一段階——「愛を得るための観想」

キリストの復活をめぐるさまざまな場面を默想することによって、復活の喜びや天国の栄光といった慰安の感情に満たされ、さらには、浄化された靈魂が無限なる神の愛に包ま

れる恩恵に与る、「合一道」 via unitiva。

黙想の具体的な内容を列挙すると、復活したキリストの①マリアへの顕現<sup>(13)</sup>、②マグダラのマリアへの顕現、③弟子たちに復活を告げに行こうとするマグダラのマリアたちへの再顕現、④ペテロへの復活への確信、⑤エマオへ行く二人の弟子への顕現、⑥トマス以外の弟子たちへの顕現、⑦トマスへの顕現、⑧漁をしていたヨハネら七人への顕現、⑨タボル山での弟子たちへの顕現、⑩五百人以上の使徒たちへの顕現、⑪ヤコブへの顕現、⑫アリマタヤのヨセフへの顕現、⑬パウロへの顕現、⑭神の国を約束した四十日間にわたる顕現、となっている。

ちなみにこの週の靈操は、一日に五つの靈操ではなく四つ、それも第一靈操を起床直後、第二をミサないし昼食前、第三を晩課の時にそれぞれ別のテーマで行ない、最後に夕食前に第四として、その日の三つの靈操のうちもっとも大事な場面、ないしより深い精神-靈的感動や意味を感じた場面に思いを込めて黙想することになっている。すなわち、この週では、キリストの復活と天国の光栄からもたらされる、慰安に満ちた感情により大きな力点がおかれるのである。

こうして最後に、「愛を得るための観想」に入ることになる。すなわち、主なる神と天使たち、ならびに諸聖人の前に自分がいる様を、具体的にイメージ化する。そして、神から賜ったものを思い起こし、それに対して自分のあらゆるものを捧げることを誓う——「主よ、すべてを取ってお受け入れ下さい。私のすべての自由も、記憶も、知性も、意志も。……どうぞ、み旨のままにお取り計らい下さい。ただ主の愛とお恵みをお与え下さい。そのお恵みだけで私には十分なのです」(234番)。そして、それまでの自己から脱却して神の懷に還帰し、神の愛に包まれた新しい自分に生まれ変わることになるわけである。

### III. イグナティウスの示現体験と自己実現

周知のように、旧約の預言者はもとより、パウロ、ルター、フォックス、ウェスリーといった聖者や開祖と呼ばれる存在には、幻視や幻聴、さらには夢幻様状態の発現など、精神病理的現象がしばしば伴われる。イグナティウスに関しても、たとえばG. ヘッセは、彼を側頭葉癲癇<sup>テンカン</sup>と診断して、その神秘体験を癲癇発作性の幻覚に起因するものとみなし、さらには側頭葉癲癇者に多く見られる几帳面・些末事へのこだわり・徹底性などが、イエズス会の軍隊的規律に反映した、と論じている<sup>(14)</sup>。しかし、癲癇発作による幻覚は、一般に瞬間的でストーリー性を持たないものが多いのに対して、イグナティウスの場合、多くが持続的であり、しかも「靈操」における黙想では「対話」までなされており、背後に

高度な修練による構想力（イメージ喚起力）の強化が窺われる。それゆえ、初期の瞬間的な幻視・示現に関しては、癲癇発作性を疑うこともできようが、しかし彼の神秘体験をすべて側頭葉癲癇に帰するには無理があると思われる。むしろ彼を、空海や明惠と同様の「直観像<sup>(15)</sup>」能力の持ち主とみなした方が適切であろう。

またイエズス会の性格についても、彼固有の資質だけでなく、旧貴族の騎士的伝統、海外進出に熱心なバスク人気質、さらには当時まさに大国にならんとするスペインの国家精神、プロテスタントの台頭に抗し世界伝道を希求する教皇庁の意向などが大きく関わっていることは言うまでもない。言い換えると彼は、こうした社会的要請に応えつつ、自らの神秘体験能力を生かして、中世的敬虔人トマス・ア・ケンピスに代表される、僧院での内向的静的な祈りへの専心と、それと矛盾しがちな外向的動的な布教活動とを、《神のより大いなる栄光のために》ad majoren Dei-gloriam(A.M.D.G.)という旗印の下に、自らの一生を通して、また「靈操」を中心に据えたイエズス会組織の形成を通して、止揚することに成功したと言えよう。

それでは、この内向的活動と外向的活動という両極の止揚、すなわち全体性の実現は、イグナティウスにおいてどのように展開したのだろうか。言うまでもなく、人生前半の最後に瀕死の重傷を契機として、それまでの生き方<sup>(16)</sup>を全否定して神に奉仕する騎士に生まれ変わった点において、彼はジェイムスの言う「二度生まれ型」の回心の典型例である。しかし彼の回心は一回限りの瞬間的なものでなく、その後も、マンレーサの洞窟において漸次的な深化をみせている。しかもそれは、当然のことながら、「靈操」の四段階——浄化・選択・照明・合一——と同じ過程を踏むものであった。

ただし、最初の浄化段階は糺余曲折に富むものであった。まず彼は、マンレーサでの行を始めるにあたって、自らを浄化するための総告解を行ない、そのち激しい苦行を修している。だがそれは、壮絶なものであったとはいえ、浄化としてまだ不十分だった。というのは、しばらくすると、「無数の目をもち光輝く蛇」の幻視が現れ、彼を感動させた。ところがこれを契機として彼は、「荒寂」<sup>すきみ</sup>つまり心身ともに衰弱して、抑鬱状態に陥ってしまったからである。一般に、修行の初期には自律神経系の身体異常や、雜念雜想さらには幻覚の発現といった心身の異常が生じることが多く、たとえば禅仏教では「禪病」、天台止観では「魔事境」と呼んで、この時に生ずる幻覚がいかに神秘的に思えようとも、それに囚われてはならないとしている。これを分析心理学的に説明すると、修行の心理面への影響として第一に挙げられるのは、意識活動の低下と無意識の活性化である。そして、とくに修行の初期には無意識が意識昂進し、その結果、雜念や幻覚が奔放に活動することになるが<sup>(17)</sup>、その内容は、個人的な「抑圧された心の暗い影の側面」、さらには超個人的

な「影」元型に由来するものが多い。それゆえ、総告解という意識的な形だけでなく、無意識にまで目を向け、こうした個人的および集合的な「影」とある程度しかるべき対決ができるようになって初めて、浄化段階が終了することになるのである。

それでは、イグナティウスが対決しなければならなかった「影」とは、いかなる類のものだったのだろうか。第一に指摘できるのは、彼が人生前半に犯し、しかもそれに対する罪意識を抑圧してきた悪徳行為を巡るもの、つまり個人的な「影」である。しかしそれよりも「影」として重大なのは、実は、ひたすら苦行へ邁進しようとする彼の態度であった。というのは、この背後には自力的に神へ近づこうとする英雄主義的な傲りが明らかに窺われるからである。そこで彼が次の段階に進むためには、それまでの外的身体的側面を重視する武人的態度を捨てて内的心的側面に目を転じ、しかも自力的な計らいを捨ててもっぱら神に導かれる生き方を改めて選び取る、「選択段階」を経る必要があったのである。

ところでユングは、この「無数の目をもち光輝く蛇」に関して、これはすぐれて元型的な特徴を備えた心像であり、しかもキリスト教の象徴体系を超えて、やはり無数の目をもつペルシアのミトラ神やリグ・ヴェーダの原人<sup>ブルシア</sup>、さらには光輝く存在であるグノーシス主義の原人<sup>アントロボス</sup>と同じ象徴系列に属するものである、と述べている<sup>(18)</sup>。すると、もしイグナティウスが、この「原人元型」に由来する幻視を——ことに「影」の問題が未解決な段階で——発現するままにしておいたとしたら、単なる心身衰弱に留まらず、これに呑み込まれて「自我崩壊」してしまうか、これと自己同一して「自我肥大」に陥る、すなわち傲りという罠にはまってしまう危険——ニーチェにとってのツアラトゥストラ——が大きかったと言えよう。それゆえ、彼がトマス・ア・ケンピスを通してキリストを模倣し、キリスト教の象徴体系から外れた（異教的な）幻視を切り捨てる（靈動弁別する）道を選定したことはきわめて重大な意義をもつことになった。言い換えると、キリストとルシファーの陣営のどちらにつくかという問題は、善惡や聖俗の選択であるばかりか、キリスト教の象徴体系の内に留まることによって、こうした生<sup>なま</sup>の元型的心像から自らを守る防衛網を獲得する意味も持っていたのである。

こうして「神の国」の住人になることを最終的に選定したイグナティウスは、三位一体に関する示現を始めとして、キリスト教に即した幻視を次々に体験することになった。ただし、彼が「合一段階」に到達するのは、ずっと後のことであり、マンレーサでの幻視は、「キリストの国」を彼に感得させるための「照明段階」のものでしかなかった。すなわち、「ストラーダの示現」に至って初めてキリストとの合一状態<sup>(19)</sup>、言い換えると神話的表現では「我と父は一つなり」と呼ばれる（ヨハネ10:30），有限で断片的な自我が無限で全体的な自己<sup>ゼルブスト</sup>と一致する状態が実現したのであり、この示現以前の幻視は、それを予示

・ 照明し、そこへ導くものでしかなかったのである。

その意味において、イグナティウスの生涯においてマリア・イメージの果たした役割はきわめて興味深い。そもそもマリアは、彼にとって巡礼に出る契機となった存在であり、最初の誓願を彼女に立て（アランサス）、モンセラットでは彼女に軍刀と短剣を捧げている。最終的な示現を得たのも、ラ・ストラーダのマドンナ教会（道の聖母教会）においてであった。「靈操」においてもマリアは大きな位置を占めている。これは、騎士特有の貴婦人崇拜が聖母崇敬に昇華されたものと言えるが、彼にとってのマリアは、まさに自己実現への道を指示し、神との仲介役を果たしてくれる、高次のアニマ・イメージだったのである。しかもこれによって、教義が許すかぎりの微妙な形で、三位一体に欠落した女性的要素を補うことができ、心的全体性がより十全なものとなった。言い換えると、イグナティウスの生涯とは、神に導かれつつ自らの影元型やアニマ元型を統合し、さらにイエズス会の設立を通して、人生前半の外向的な生き方とその後の内向的な生き方とを止揚することによって、心の全体性を達成する過程だったのである。そして、この過程を人々に組織的系統的に体験させるために考案されたのが、「靈操」という修行体系だった。

#### IV. 「靈操」の心理学的特性

ユングが用いた無意識界の探究法の一つに、「能動的イメージ喚起法」 aktive Imaginationと呼ばれるものがある。これは、意識活動ができる限り低下させることによって、「無意識から立ち現れてくる情動、激情、ファンタジー、念頭を去らぬ観念もしくは夢のイメージを、目覚めた状態において、批判的な注意をそそぐことなく、それだけを自由に働くかせ、一個の客観的な対象物を扱うように、分析すること」を指す<sup>(20)</sup>。すなわち、「構想力・想像力」 Imaginationを活性化することによって、諸イメージを喚起し、その源泉である無意識の内容を探究しようとする方法である。

彼自身も指摘しているように<sup>(21)</sup>、この「能動的イメージ喚起法」は、「靈操」と近しい関係にある。だが幾つかの点において、相違も見られる。その一つは、イメージの認識主体の問題である。すなわち前者の場合、上記の引用にもあるように、無意識の分析・探究に目的が置かれており、その分析主体はあくまでも存続して消失することがない。ところが後者の場合、その途上はどうあれ、最終的には、主体と客体の断絶が消失する、つまり無限の神に包まれて「自」がなくなってしまうのである。

それ以前の段階にも相違が見られる。ユングが「能動的イメージ喚起法」を用いて、自己の内的人格をイメージ化し、それにフィレモン——老賢者——といった名をつけて対話

を試み、その「教え」を乞うたことはつとに知られている<sup>(22)</sup>。ところが「靈操」では、前述したように、もっぱら語りかけるだけで、それに対する「応答」は——たとえあっても——無視される。これは、神は人間をはるかに超越した存在であり、そもそも一方が語りかけて他方がそれに応える、という形での対話など成り立ちはずもないという意味においてキリスト教的にはきわめて当然のことであろう。しかし、それとは別の意味において、これが「想像力」の自由な活動に一定の枠をはめる措置であるのも確かである。

この「想像力」の制限に関して同様の役割を果たすものとして、やはり前述した、キリスト教の象徴体系の問題が挙げられる。イグナティウスの生涯では、「無数の目をもつ蛇」というキリスト教象徴体系を超えたより普遍的な——「原人元型」に由来する——イメージが、後に彼のキリスト教理解が進む中で、悪霊によるものと解釈し直され、退けられるようになった。さらに「靈操」では、もっぱらキリストの一生の諸場面を黙想するという形で、それ以外のイメージの発現には初めから厳しい制限が設けられているのである。

ところで話は多少ずれるが、岸本英夫は、イグナティウスとほぼ同時代の、スペインのキリスト教神秘家、聖テレサ(1515-82)の『自叙伝』に見られる心的諸作用の沈潜過程と、バタンジャリ・ヨーガのそれを比較考察し、時代的にも文化的にも隔たった両者の間に、著しい類似が見られると指摘している<sup>(23)</sup>。一方のテレサは、瞑想を重ねると、まず五感が鎮静し、次いで「靈魂の三能力<sup>(24)</sup>」のうちの意志と知性(悟性的な分別知)が活動を停止する。ところが記憶は最後まで残り、幻想と一緒に「夏の夜半の蛾の羽ばたき」のように狂いまわる。そこでこれが消滅するのを待って、初めて神と「融合」できるとする。他方、ヨーガにおいても、五感の問題は別として、その他の心的諸作用の沈潜過程は、記憶が最後まで残るとする点まで照應しているというのである。

話を元に戻すと、テレサのいう記憶および幻想とは、前意識的な記憶はもとより、抑圧された個人的無意識、さらには集合的無意識の内容が顕在化したもの、つまりは「想像力」によって無意識から喚起されるイメージに他ならないと考えられる。それゆえ、心的諸作用を沈潜させる中で、最後まで活動を続ける「想像力」は、無意識の活性化に欠かせないと同時に、自己を神の内に消滅させる上で多大な障礙ともなるものなのである。そしてまた、「想像力」を無制限に活動させておくと、キリスト教の象徴体系を逸脱したイメージを喚起し、さらには前述の「自我崩壊」ないし「自我肥大」に陥る危険も生じてくる。したがって、イグナティウスが黙想という形でこの「想像力」を積極的に賦活する一方で、その活動範囲をキリストの一生というイメージ系列の中だけに留めることによって、キリスト教的な形での神との「合一」へ水路づけをしていることはきわめて合理的な措置であると言えよう<sup>(25)</sup>。

ところで、無意識からイメージが発現てくるとき、そこには喜怒哀楽に代表される「情動」Emotionが必ず伴われることになる。そしてこの情動と関連して、「水路づけ」の効果を果たしているものを、もう一つ指摘することができる。それは、「靈動弁別」と名づけられた、イグナティウス独特の方法である(『靈操』313-36番)。これは、基本的には、「慰安」<sup>なぐさめ</sup> consolación 「荒寂」<sup>すきみ</sup> desolaciónという二つの靈動、すなわち情動を対象とする。「慰安」とは神への愛が燃える中で平安と喜びを感じる状態を言い<sup>(26)</sup>、「荒寂」は逆に神からの隔絶感や不安を感じる状態を言う。ただし、後者がもっぱら惡靈や地獄に関係するものであるのに対して、前者は必ずしも神や善靈から発するとは限らないとされている。その理由は、まさに「蛇」の示現が初め「慰安」を与えるものであったように、惡靈が善靈を装って「慰安」をもたらし、靈操者を少しづつ自分に従わせようとすることがあるからだという。そのため、「慰安」と「荒寂」だけでなく、眞の「慰安」と偽りのそれとを弁別することも必要になってくる。そして弁別する際の基準は、その靈動が精神-靈を成長させ、神への愛を増大させる道へ通じているか、それとも途中から横道にそれているかにあるとされている。またこの判断は、靈操者単独ではなく、靈的な事柄や惡靈の悪だくみを熟知した、指導者の下でなされることになっている。それゆえ、この「靈動弁別」によって、キリスト教的な神への道にそぐわない靈動・情動を発するイメージが退けられ、キリスト教の象徴系列へと「水路づけ」されることになるわけである<sup>(27)</sup>。

ここで感覚の問題にも触れておくと、先にテレサは、心の沈潜過程において、心の諸作用のうち活動を停止させるものの筆頭に感覚を挙げていた。これは瞑想、つまり内界に沈潜する上で、外界の刺戟を受容するものである五感の作用が最大の妨げになるという意味において当然のことである。しかしそれでは、「靈操」において、五感の活用がしばしば、それも個々の「默想」がある程度進んだ段階で登場するのは如何なる意味をもっているのだろうか。これを一言で説明すれば、テレサの言う感覚が通常の、外界刺戟の受容のための感覚であるのに対して、「靈操」で言う感覚は内界の諸事象、とくに心像に対する内的知覚を指すものと考えられる。たとえばヨーガにおいて、まず現実の水を凝視した上でそれを氷のイメージに変換し、次いでより堅固な瑠璃に変え、そうして最終的に堅牢な実体をもった「大地」を内界に作り出すという行を修する。これは、外的知覚を内界に転ずることによってイメージを具象的なものにし、リアリティを与えるための措置と言える<sup>(28)</sup>。それゆえ、「靈操」における五感の活用も、集中力の鍛練であるばかりでなく、感覚を外から内へ向けることによって、外界への囚われを回避し、さらにイメージにより具象性を与える意味をもっていると位置づけることができよう。

これまで「靈操」の心理学的特性を考察してきたが、最後に、身体的側面にも若干触れ

ておきたい。たとえば苦行に関してイグナティウスは、罪の源泉である肉体を減するため、罪を償うため、自分自身に打ち克つため、という他に、苦行のもたらす苦痛を通して、受難時のキリストの苦悩に対する共感を深めるためという意味づけをして、人間心理に対するきめこまやかな配慮を見せてている。しかしその一方で、門脇佳吉も指摘しているように<sup>(29)</sup>、身体的工夫そのものに対する積極的な意義は、「靈操」においてほとんど顧みられていない。身体面に対する主な規定を列挙すると、わずかに——靈操の際の姿勢は自由でひざまづいても横になっててもよい。ただし、いったん靈操に入ったら、その姿勢を変えてはならない(76番)。過度でなく中庸の範囲内で、減食・睡眠時間の短縮・鞭打ち等の苦行をする(82-6番)。「律動」による祈禱、すなわち最初の一呼吸の間に祈禱文の一匁を念禱し、つぎの一呼吸の間にその意味を考察し、さらにこれを交互に反復する(258番)——ぐらいしかないのである。これには精神-靈を重視して肉体を軽視するキリスト教の伝統の問題が関わっている——「わたしは命じる、御靈によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら、肉の欲するところは御靈に反し、また御靈の欲するところは肉に反するからである。……キリスト・イエスに属す者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。」(ガラテヤ人への手紙5:16-24)——が、ここにヨーガに代表される東洋の修行との大きな相違点を見出すことができよう。

## おわりに

「靈操」の解釈をめぐって、今世紀初頭に一つの大きな転換があったという<sup>(30)</sup>。それは、修徳的主意的な観点を中心におくそれまでの解釈に対して、「生路選定」こそ「靈操」の根底をなすものであるとプルシヴァラおよびラーナーが主張したことに始まった。本稿はもちろんこうした神学的な問題とは次元を異にするものであるが、しかしイメージの流れという観点から見た場合にも、この「選定」の問題がきわめて重要な役割を果たしているとの結論が導き出された。すなわち、「靈操」とは何よりもまず修行者の「想像力・イメージ喚起力」を活性化させることを目標とする。しかし想像力の無限定な解放は、キリスト教の象徴体系から外れたイメージを産み出して修行者を異端に向かわせることにもなるばかりか、彼を「自我崩壊」や「自我肥大」の危機に曝してしまう可能性をもっている。そこで想像力を活性化させる一方で、それによって喚起されるイメージの内容をキリストの生涯の各場面を主題にするものに限定して、それから外れたイメージを弁別することがきわめて重要になってくる。つまり、「キリストの國」を「生路選定」することは、キリスト

トの生涯を主題とするイメージ体系にそって想像力を解放することを意味し、ひいては上記の危機を回避する上で多大な役割を果たす措置であると言うことができる。そして修行者は、この措置によって、死と再生を経て「我と父は一つ」となったキリストの生涯、というイメージ体系へ「水路づけ」され、最終的には神の愛に包まれた忘我状態が実現されることになるわけである。(ちなみに、こうしたイメージ操作と並行して生ずる情動の変容・昇華に関しては、本稿註(27)を参照されたい)。

ところでこの「靈操」は、原則として、イエズス会への志願者が、入会を許されたすぐ後に、四週間に亘って修することになっている。しかしそれだけで最終的な境地が実現されるわけではもちろんなく、イエズス会士は一生を通じて「靈操」を続けることになる。それゆえ、本稿で考察したような「靈操」の心的作用力とは別に、個々の修行場面では、むしろエリアーデの指摘した<sup>(31)</sup>《かのとき》illud tempusの再現という側面の方が色濃く見られると言うこともできる。つまり「靈操」を通して、イエスの一生、とくに「受難のとき」というキリスト教徒にとって根源に位置する《かのとき》を具象的にイメージ化し、さらには「靈操」の内容と深く結びつき、イエズス会にとっての原点であるイグナティウスの一生という《かのとき》に還帰することにもなるわけである<sup>(32)</sup>。

## 註

- (1) 岸本英夫「行の心理」(岸本英夫集 第三巻『信仰と修行の心理』渓声社、1975年、7、8頁)。
- (2) 主として、1553年に、イグナティウスが秘書デ・カマラ神父に口述筆記させた、『自叙伝』(安东尼オ・エバンヘリスト、佐々木孝訳『ロヨラの巡礼者——聖イグナチオ自叙伝——』中央出版社、1980年)に依拠する。その理由に関しては、註(32)を見よ。
- (3) この体験が、後述する「靈動弁別」の基となった。
- (4) 「心靈修行」Exercitia spiritualiaという語は、中世に始まり、たとえば大ゲルトルーディス(Gerard,~1398)は、『靈的向上について』(De spiritualibus ascensionibus)および『靈力刷新について』(De reformatio virim animae)の二書を著わし、祈禱による靈的向上について論じている。しかし、イグナティウスがこれを——少なくともマンレーサ時代に——参照した形跡はない。ただし、彼が寄留したモンセラットのベネディクト会修道院では、1500年に『靈的生活の訓練』(Exercitatorio de la vida espiritual)が編纂されており、これを彼が参考したことは十分に考えられよう。
- (5) 彼はこの状態を、後に、「荒寂」と呼んだ。
- (6) このときの草稿は 散逸してしまっていて、現存していない。現在残っているのは、その後のパリ勉学時代に書き直されたものと言われている。これは1548年7月31日、教皇パウロⅢ世によって正式に認可され、同年ラテン語訳されて初刊行。
- (7) イグナティウスはこの示現に先立って、父なる神が自分をキリストに仕える者として彼と一緒に

に置いてくれるよう、マリアを通して祈りを捧げ、それが叶うまで初ミサの執行を延期すると決めていた。そのため、彼が最初のミサを執り行ったのは、1538年12月25日になってのことであった。

- (8) 1215年の第四回ラテラノ公会議、および1274年の第二回リヨン公会議における決定以来、修道会の数は、ベネディクト会・シトー会・フランシスコ会・ドミニコ会の四つに限定されていた。そのため、新修道会設立の計画はさまざまな妨害に遭った。

なおイエズス会は反宗教改革運動の一環として設立されたと言われることがあるが今野国雄によると、イグナティウス自身は宗教改革に対する反駁書をまったく書いていないという。それどころか彼は、当時の衰退しかけた修道制に批判の目を向け、キリスト教の刷新を目指した点において、ルターと同一線上にあったとまで言える。ただし後者が、定住農耕民のようにもっぱらザクセン内で修道制を攻撃し、その結果修道制を否定するに至ったのに比し、前者は神の騎士として各地を駆け巡りながら、あくまでも修道制の枠内に踏み留まって、修道理念の再生の闘いに従事した点に大きな相違が見られる（今野国雄『修道院』岩波書店、1981年、194頁）。

- (9) 資料としては、ホセ・ミゲル・バラ訳『聖イグナチオ・デ・ロヨラ 精操』新世社、1986年を用いた。

- (10) イグナティウスは、中世の伝統に従って、記憶memoria・知性entendimiento・意識voluntadを、「靈魂の三能力」と呼んでいる。

- (11) この対話は、もっぱら靈操者が語りかけるだけで、応答の方は無視される。このことに関してエングは、「それは恐らく、これ【応答】が人間からくるものでしかないと、退けるべきであると考えられたからであろう」(GW 9I,S.146)と述べている。

また彼は、ルランドゥスの『鍊金術辞典』における「瞑想」meditatioの項：「《瞑想》という語を用いるのは、何ものかと、といつてもそれは眼には見えないのだが、そういう何ものかと心の内で対話を行なう場合である。この内的対話は神への呼びかけ【祈り】であってもよく、自分自身との対話や自分の守護天使との対話であってもよい」を引用して、イグナティウスの「対話」colloquimを含めた「默想」meditaciónが、この意味での「瞑想」に合致する、と指摘している(GW 12II S.317,池田紘一・鎌田道生訳『心理学と鍊金術 II』人文書院、1976年、65頁)。

- (12) 101番では観想だが、118番で靈操と書き換えている。

- (13) 聖書には、家に戻ったマリアにキリストが顕現した、という記述はない。これはイグナティウスが、『キリストの生涯』および『聖人の華』を基に、当然そうあった筈と推論したものである。

- (14) G.Hesse,Anfallsleiden und Psychose Loyolas,Nervenarzt 38:102,1967.

- (15) 「カメラ・アイ」とも呼ばれるように、一定の図像ないし光景を凝視した後、しばらく時をおいて、その画像を眼前に実在するかのように知覚再生する現象。凝視直後に生ずる残像現象とは異なる。通常11~15歳の一部児童に見られるが、中には成人後もこの能力を持ち続ける者もあり、「直観像素質者」と呼ばれる。

- (16) イギリスの歴史家プロドリックは彼の青年時代について、「それは完全に外向的な生活で、乗馬

・剣術・ダンス・カードに興じ、宫廷で御婦人方のご機嫌をとることに喜びを覚える毎日だった」と述べている (James Brodrick, *Saint Loyola, The Pilgrim Years: 1491-1538*, New York, Farrar, Straus and Cudahy, 1956, P36)。

- (17) 抽論「解脱会の修行」(B. エアハート・宮家準編『伝統的宗教の再生』名著出版, 1983年), 200-1頁。
- (18) Jung,C.G., GW.7 S.85, GW.8 S.225, GW.13 S.96,236.
- 関連事項を挙げておくと、「プルシャは千頭・千眼・千足を有す」(辻直四朗訳(『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫, 1970年, 319頁)。「アヴェスターのミトラは光のヤツタ(靈)であり,『一万の目を持ち, 高く, 全知全能(ペレトゥヴァエダヤナ)で, 力強く, 眠りを知らず, 常に目醒めている(ジャガウルヴァウングヘム)』(マンリー・P・ホール著, 大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳『象徴哲学体系I 古代の密儀』人文書院, 1980年, 135頁)。また,「蛇」の象徴性についても触れておくと, イグナティウスの示現から真っ先に想起されるのは,「熾天使」であろう。これは蛇・人間・鳥が一体となった形姿をしているとされ, たとえば「イザヤ書」30:6では,「炎のように飛びかける蛇」fiery flying serpentと記されており, また絵画上では日輪車sun-wheel chariotや, 無数の目を散りばめた四枚の翼のついた車輪の上に描かれることがある。しかしそれ以前に「蛇」は, 原初の状況やその豊饒性を表す象徴としてさまざまな神話に登場しており(たとえばエジプト神話に登場する原初の海蛇アバブ), またその素早い動きや,「死と再生」を示唆する脱皮行為などから, 生命力や治癒力の象徴にもなっている(たとえば医神アスクレーピオスの杖にからみつく蛇)。ところが「蛇」は他方で, こうしたプラスイメージと並行して, 死や罪悪をもたらす邪惡な存在としてのイメージも併せ持っている。さらにそのファルス的形状から, 性的欲望を象徴するものもある。それゆえ以上より, イグナティウスの視た示現は,「光」と「無数の目」だけでなく「蛇」の要素も「原人元型」の特性が窺われるが, しかし同時にそこには, 性的問題を含めて個人的および超個人的な「影」の側面も投影されていると考えることができる。
- (19) 神との「合一」と言っても,《神人合一》deificationを意味するものではない。彼にとって, 神はあくまでも人間から超越した存在であって, 人間が神と一致することなど思いもよらないことであった。彼の言う「合一」とは, 絶対の神に己の全てを捧げ尽くした赤誠そのものの状態, 神の愛に包まれて「自」が消失した状態である。ちなみに, 実際に「靈操」を修した門脇佳吉氏は, この自己放棄を, 禅の「大死一番」に匹敵するものとしている(門脇佳吉編『修行と人間形成』創元社, 1978年, 250頁)。
- (20) M-L・フォン・フランツ(高橋巖訳)『ニング——現代の神話』紀伊國屋書店, 1978年, 118頁。
- (21) GW. 11, S. 535. (湯浅泰雄・黒木幹夫訳『東洋的瞑想の心理学』創元社, 1983年, 135頁)。
- (22) ニング『自伝』VI章。

- (23) 岸本英夫「修行に伴う心の沈潜過程」1942年（岸本英夫集 第二巻『神秘主義とヨーガ』渓声社, 1975年, 所収）。
- (24) 本稿, 註(10)を見よ。
- (25) これに関してユングは、こう述べている。「宗教的儀礼は次のような点で、自然に生じる変容の過程とは区別される。それらは、たとえばイグナティウス・ロヨラの『靈操』とか、仏教やタントリズムのヨーガ的瞑想の場合にみられるように、自然発生的な発展過程を先取りし、自然に生まれてくる象徴的イメージの代りに、意図的にえらばれ、伝統によって定められた象徴を配置するのである。」(GW. 11, S. 564. 前掲訳書84頁)。
- (26) 自らの罪への痛悔や受難時のキリストの苦悩への共感なども、「慰安」に含まれる。
- (27) この「水路づけ」を前掲拙論の枠組みで言い換えると、修行の初期には不安定な情動が大量に発生し、自律神経系や内分泌系の異状、雜念や幻覚の奔放な発現がもたらされる。そこで、第一週では罪や地獄をめぐる苦悩や痛恨、第二週では「神の国」への喜び、第三週では受難をめぐる苦悩、第四週では復活への喜びと慰安の念、というように両極端に位置する情動を交互に賦活することによって、日常的な、さらには上記の不安的な情動を、宗教的感情と呼ばれる歓喜昂揚感にあふれつつ安定した情動へ徐々に変容・昇華する。そして、神の愛に包まれた清澄な状態へと「水路づけ」するのである。
- (28) GW. 11, S. 616 (前掲訳書238頁), GW. 14 II, S. 272.
- (29) 門脇、前掲書、242頁。
- (30) 高柳俊一「瞑想と現代カトリック神学——カール・ラーナーの場合」(門脇佳吉編『瞑想について』創元社, 1982年110頁)。
- (31) M. エリアーデ(石井忠厚訳)『エリアーデ日記(下) 旅と思索と人』未来社, 1986年, 350頁。
- (32) 本稿のI章において、イグナティウスの生涯を主として彼の自伝に依拠して記したのは、このためである。すなわち、「靈操」を修する者にとって重要なのは、歴史的事実ではなく、あくまでもキリストとともに歩んで心的全体性を実現した、「彼の物語」なのである。